

進路意思決定における認知・感情過程

— 高校から大学への追調査に基づく検討 —*

Cognitive-affective Decision-making Processes in Choosing University: A Longitudinal Study of High School Students

楠見 孝**・栗山 直子***・齊藤 貴浩****・上市 秀雄*****

問 題

本研究の目的は、第一に、進路の意思決定過程における認知メカニズム（とくに意思決定方略や類推など）を解明することである。第二は、満足や後悔などの感情要因を検討することである。具体的には、高校生3年生が、進路を選択する意思決定においてどのような方略を用い、どのような過程を経て決定にいたるのか、その後の行動も含めて、長期的にとらえ、その認知的、感情的な時系列的变化をとらえる。

高等学校における進路指導において、大学やその入試の多様化のなかで、高校生の主体的な進路選択能力の育成とそれを支える進路指導の充実が重要な課題である。進路指導の研究領域では、志望動機や進路意識などと進路意思決定に関する研究が蓄積されてきた（たとえば、淵上, 1984a；

1984b；八木・齊藤・牟田, 2000；鈴木・椎名・石塚・柳井, 1997；鈴木・柳井, 1993；豊田・前田・室山・柳井, 1991；浦上, 1992）。しかし、進路と生徒の多様化の中で、生徒が実際にどのような認知プロセスで意思決定をおこない（下村, 1996；1998）、どのような支援が可能なのか（横山, 1997）に関する認知心理学的な実証的な研究はまだ少ないのが現状である。本研究と同じ高校の生徒を対象とした先行研究（栗山・上市・齊藤・楠見, 2001）においては、高校生たちが、自らの進路選択の際に何を考え、どのように決定をおこなうかに焦点を当て、その主な要因を明らかにすることができた。しかし、進路指導の成果は、進路を決定した時点で終わるのではなく、実際に大学生活あるいは浪人生活をはじめていく中で、どのように自分の決定を意味づけ、その後の人生の決定に生かしていくかによって現れると考えられる。しかし、現実には、卒業後の追指導や追調査は難しく、それらが行われることはあまりなかった。そこで、本研究では、卒業後の追跡調査をおこない、進路選択後の行動や認知、感情の変化を明らかにする。

本研究は、進路指導研究だけでなく、認知心理学、意思決定論も含めた学際的な研究を目指している。意思決定論では、意思決定の規範的な理論やモデルが提唱されてきたが、それが、人生における現実場面での意思決定とは異なるという指摘がされ、自然状況における意思決定（naturalistic decision making）研究がされるようになってきた（Zsombok & Klein, 1997）。たとえば、従来の効用最大化理論では、選択肢とその効用が明確であることが前提であるが、進路決定をはじめ現実の決定ではこれらが明確でないときが多い。そこ

* 著者順は執筆順による。楠見は1と5と全体の調整、栗山は2、齊藤は3、上市は4を担当した。本研究は、平成14-17年度「進路意思決定における認知・感情過程のモデル化」文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(代表 楠見 孝)による。

** 京都大学大学院教育学研究科 (Kyoto University)

*** 東京工業大学大学院社会理工学研究科 (Tokyo Institute of Technology)

**** 大学評価・学位授与機構評価研究部 (National Institution for Academic Degrees and University Evaluation)

***** 筑波大学大学院システム情報工学研究科 (University of Tsukuba)

連絡先：楠見 孝 kusumi@educ.kyoto-u.ac.jp

で、本研究では進路決定をはじめとする現実の決定において重要と考えられる3つの認知的、感情的な過程に焦点を当てる。

第一は、進路決定において、自他の過去の経験を利用する類推や他者からのアドバイスの役割である。類推は認知科学において活発に研究がされており、これを意思決定研究に適用する試みがあるが (e.g., Holyoak & Thagard, 1995)、現実の意思決定に適用した実証研究はまだ少ない。また、意思決定におけるアドバイスの役割については、最近研究が盛んになりつつある (e.g., Yaniv & Kleinberger, 2000)。そこで、進路決定においてどのように類推や体験談 (アドバイス) が利用されているのかをまず明らかにする。

第二は、進路意思決定における期待と満足に関わる認知・感情過程である。大学選択において、進路先についての期待は決定に大きな役割を果たし、それは入学後の満足感に影響すると考えられる。現実の意思決定においては、効用最大化よりも、選択肢がある目標水準を満たしていれば決定するという満足化によることが多い (e.g., Simon, 1996)。ここで、進路決定は、満足が得られるだろうという期待に基づいており、現実の満足の評価は入学後におこなわれる。そして、期待と現実とのギャップが満足度に影響をする。本研究では、それを明らかにするために、入学後の追跡調査もおこなう。

第三は、進路決定後の後悔である。後悔は決定の失敗に伴うネガティブな感情であるが、それはその後の人生の教訓となり、行動の改善に結びつく感情として注目されている (e.g., Gilovich & Medvic, 1995)。しかし、現実の意思決定をとりあげて、決定後の後悔を追跡調査した研究はまだ少ない。そこで本研究では、意思決定のスタイルが後悔にどのように影響を及ぼすかを明らかにすることで、後悔のない決定のための指導方法もあわせて検討する。

調査の概要

調査は、高校3年生対象の調査と卒業生を対象とした追跡調査からなる。

高校3年生対象の進路選択時の調査

調査対象 首都圏のS県立高校の3年生全クラス、毎年約380名 (男女ほぼ半々)、2001-2004年度の合計約1900名であった。S県立高校は、ほぼ全員が進学する普通科進学校である。

方法 調査は質問紙をロングホームルームで配

布回収した。

卒業生対象の追跡調査

調査対象 進路選択時の調査に回答したS県立高校卒業生。2002-2004年の調査では、卒業後5ヶ月後の卒業生。2005年8月調査では、卒業後5ヶ月後、1年5ヶ月後、2年5ヶ月後、3年5ヶ月後の卒業生を対象とした

方法 調査は郵送法でおこなった。回収数は、毎年約160名、のべ約600名 (回収率は約40%) であった。調査はいずれも10頁の冊子であり、回答所要時間は約30分であった。年度ごとの質問項目と記述データは楠見 (2006) に掲載している。

決定における類推と方略選択

日常的な意思決定場面は、大変複雑で不確定である。なぜなら、我々は、選択肢の数がいくつあるのか、それらの効用や確率はどれくらいなのか分からない状況の中で意思決定をしなければならぬ場合がほとんどであるからである。従来、人間の意思決定の方略としては、効用最大化、リスク最小化、満足化などが考えられている (e.g., Koehler & Harvey, 2004; Simon, 1996; 竹村, 1996)。また、進学や就職などの人生の意思決定では、複数の制約条件を同時に考慮することが必要である。たとえば、自分の能力や父母の意見は、多くの進路の中から進路を選ぶ際に、選択の範囲を限定する。そして、最終的に決定するためには、能力と父母の意見のように、時には競合する複数の制約条件を充たすようにバランスを考慮しつつ、折り合いをつけて選択肢を絞り込んでいくことが必要となる。その際、決定場面に関する知識が不足している場合や、よく知らないことに対する決定をおこなう場合には、過去の経験から類似している状況を当てはめて類推することも多くある (Holyoak & Thagard, 1995)。しかし、進路決定において、このような複数の制約を充足していく過程としての意思決定方略や類推の影響は十分には検討されてはこなかった。

そこで、ここでは、高校生の進路決定において、どのような意思決定方略と類推が利用され、どのような他の要因と関連をもっているのかを明らかにする。

栗山ら (2001) は、高校生の進路決定における類推、意思決定方略、それらの因果関係などを明らかにしている。類推については、「高校受験の経験 (自己の経験)」はほとんど影響がなく「体験談 (他者の経験)」が少しながらも影響してい

ることが明らかになった。しかし、一概に他者からの体験談と言ってもさまざまな情報が存在する。したがって、体験談から得られた情報に関して、具体的に検討をする必要があると考える。研究1では、体験談から得られた情報を整理し、体験談から得られた情報が高校生の進学動機とどのように関係があるのかを明らかにすることを目的として調査を行った。

研究1 方法

S県立高校の3年生352名（男子169名，女子179名，性別無回答4名）に2001年11月に質問冊子を配布回収した。

質問項目 体験談から得た情報についての項目を設定した。体験談を通じて得られた情報の種類は、進学先の設備，世間の評判，交友関係，合格

可能性，興味のある分野入試日程・科目取得資格，学費・生活費の8つを想定し，この8つの情報を体験談からどれくらい得たかを5段階評定（1：全く得ていない－5：とても得ている）をおこなった。たとえば「進学先の設備の情報を体験談から得ましたか？」という質問であった。進学動機に関しては，淵上（1984a, 1984b）や八木・齊藤・牟田（2000）などを参考に23項目作成した（表1には全ての年度の調査に用いた17項目を掲載）。

分析方法 分析の手順は，栗山ら（2001）で使用した各進学動機の観測変数（「無目的」を除く）の平均値を求め，それぞれの動機が強い上位25%・動機が弱い下位25%のデータを用いた。そして，体験談から情報をどのくらい得たかの評定値について，動機ごとに上位群と下位群間で平均値の差のt検定を行った。

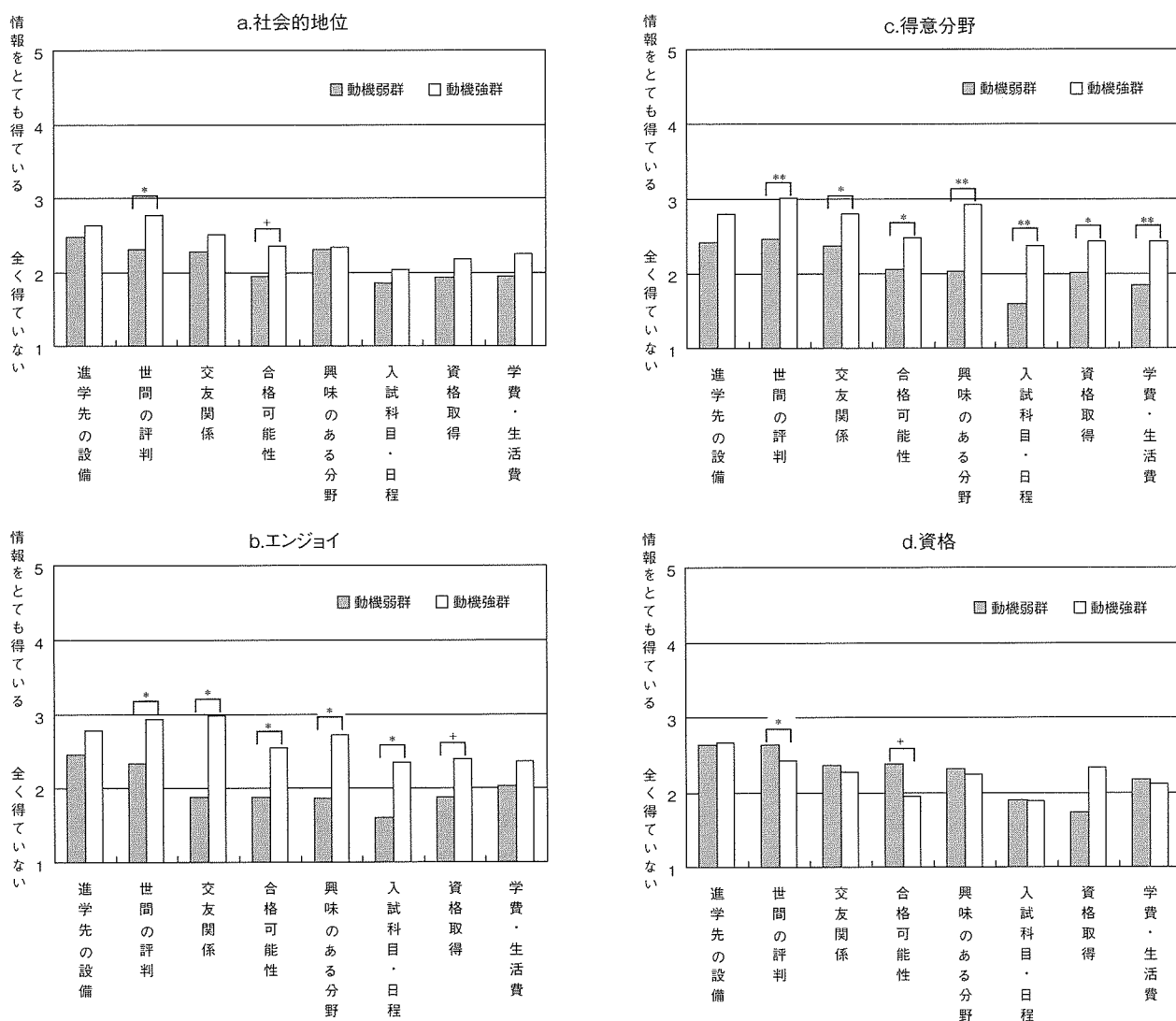


図1 動機の強さによる体験談の利用の差
各動機の強い群・弱い群間の平均値の差の検定結果

*: $p < .05$, +: $p < .10$

結果と考察

それぞれの動機ごとの結果は、図1のa(社会的地位), b(エンジョイ), c(得意分野), d(資格取得)のとおりである。

「社会的地位」を進学の動機とする生徒は、これを動機としない生徒よりも、「世間の評判」や「合格可能性」に関する情報を体験談から得ている。また、「エンジョイ」することを動機とする生徒は、これを動機としない生徒よりも、「世間の評判」、「交友関係」、「合格可能性」、「興味のある分野」、「入試日程・科目」、「取得資格」に関する情報を体験談から得ている。「得意分野」を伸ばすことを動機とする生徒は、これを動機としない生徒よりも、「世間の評判」、「交友関係」、「合格可能性」、「興味のある分野」、「入試日程・科目」、「取得資格」、「学費・生活費」に関する情報を体験談から得ている。「資格取得」を動機とする生徒は、これを動機としない生徒よりも、「世間の評判」、「合格可能性」に関する情報を体験談から得ていないことが明らかになった。

社会的地位を得るために進学しようとする生徒は、それに必要であると予測される「世間の評判」「合格可能性」といった現実を冷静にみるための情報を体験談から得ようとしている。また、大学に進学して、エンジョイしたい、得意分野を伸ばしたいと考えている生徒は、様々な多くの情報を積極的に体験談から得ようとしていることが明らかになった。これらの動機とは逆に、資格取得を動機としている生徒は、「合格可能性」や「世間の評判」を体験談から得ないことから、取得できる資格にこだわるため、それに関連しないと考える、人の体験談に耳を傾けない傾向があることが示唆された。

研究2

研究1では、高校生の進路決定における類推の利用や、他者体験談からどのような情報を利用しているのかを明らかにした。しかし、類推を利用することがどのように複数の競合する条件(制約条件)を満たしていく過程に影響を及ぼすのかの詳細は明らかになっていない。また、体験談を参考にする生徒もいれば、あまり利用しない生徒もおり、類推を利用することには個人差があると考えられる。そこで、研究2では、類推の使用の高低と、制約条件の困難度の関係を検討し、より詳細な類推の利用の影響を検討する。

方法

S県立高校の3年生379(男性188, 女性186人,

不明5)人を対象に2001年11月に質問冊子を配布回収した。

質問項目 進学動機(23項目)、進路決定に対する類推(体験談)の使用(1項目、例:誰の体験談も参考にせず、自分の意思で進路を決定するほうである)、制約条件の困難度の項目(12項目、例:志望校の難易度が自分の実力より高い、志望校の試験日程があわない)に関する5段階評価(1:全くあてはまらない-5:とてもあてはまる)であった。

分析方法 各要因の関連性を検討するため、まず因子分析で構成概念を抽出し、因果モデルを構成し、共分散構造分析法(AMOS 4)を用いて多母集団同時分析を行った。

結果と考察

まず、進学動機と制約条件の困難度についての項目について因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。進学動機については、「得意専門」「社会的地位」「資格取得」「無目的」「エンジョイ」の5因子が抽出された。制約条件の困難度については、「能力」「状況」「他者意見」に関する困難さの3因子が抽出された。

進学動機の5因子について、大学卒業後の目標達成に関わるか否かで、大きく2つにわけた。「得意専門」「社会的地位」「資格取得」などの項目からなる「長期的展望」、「無目的」「エンジョイ」などの項目からなる「短期的展望」である。これらの展望は、制約条件に影響すると考えられる。なぜなら、類推を用いて制約条件を詳細に検討する生徒の方が、長期的な展望をあれこれ悩み、熟慮して進路の決定を行っている(栗山他, 2001)ため、長期的展望に基づく動機をもつ生徒の方が様々な制約条件に対して困難であると考えているのではないかと予測される。このことを明らかにするために、類推の使用度別に因果モデルを構成し共分散構造分析によって検討を行った。観測変数は、質問項目の平均値を用いた。類推の使用度は、高($n=103$), 中($n=114$), 低($n=156$)の3段階にわけ、その中の高群と低群(図2)の比較を多母集団同時分析を用いて検討した。

その結果、適合度指標は、CFI=.970, PCFI=.602, RMSEA=.090を得た。高群と低群間の各々のパス係数間の検定を行ったところ、「短期的展望」から「状況の困難」へのパス以外は、両群のパス係数間に有意な差が認められた。

パス係数の検定結果より、類推を用いて決定を行う生徒とそうでない生徒では、進学動機と制約条件の困難度の関係に異なる傾向があることが明

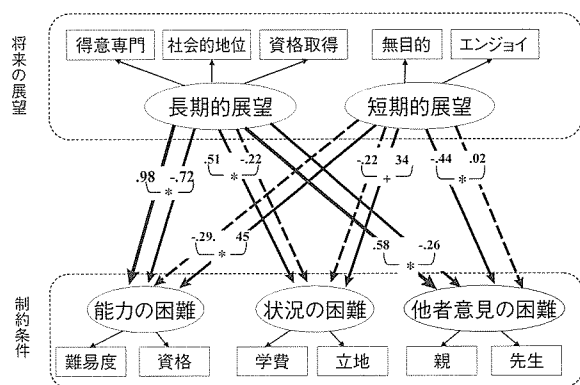


図2 多母集団同時分析による類推使用度高群(左)と低群(右)の比較 *: $p < .05$, +: $p < .10$

らかになった。進路決定に類推を用いており長期的な展望を進学動機とする生徒は、「能力」「状況」「他者意見」の困難さが制約になっており、逆に、類推を用いない生徒は、長期的展望については、それぞれの困難さへのパス係数がすべてマイナスであった。従って、類推を用いない生徒においては、長期的展望に基づく動機の高いことは、「能力」「状況」「他者意見」についての困難が制約になっていないと考えられる。逆に、短期的展望に基づく動機が高いことは、「能力」「状況」に関する困難が制約となっていることが明らかになった。これらの結果より、予測したとおり、類推を用いる生徒の方が長期的展望と制約条件の困難度との関連が強く、熟慮していることが示唆された。

類推を使用する傾向が高い生徒は、長期的な展望に基づく進学動機が高いほど、「能力」を制約条件であると考えている。一方、類推を使用しない生徒においては、短期的展望に基づく動機が高いほど、「能力」が制約条件になると考えている。類推を用いて進路を考える生徒は、「能力」を今後の将来のために重要であると考えており、類推を使用しない生徒は、「能力」を受験のために短期的に重要であると考えていると解釈できる。これらの結果から、類推を用いることによって、人生の展望と制約条件のとらえ方に違いがあることが示唆された。

考察

研究1と2の研究より、高校生の進路意思決定においては、進学動機によって体験談の利用の仕方が異なること、体験談を利用する生徒の方が「長期的展望」をもって意思決定をしていることが明らかになった。

しかし、栗山他(2001)において体験談から属性効用方略へのパス係数があまり高くないことか

ら、全体的な意思決定においては、体験談はそれほど影響がないという結果が得られている。この点について、調査時期が影響している可能性があるため、卒業生に対して、「誰から何のアドバイスがほしかったか」という記述式の質問を行ったところ、「誰から」の部分である人物は、「志望大学の学生・先輩(39%, 385人中149人, 以下同様)」「先生(19%, 74人)」が上位を占め、「何のアドバイスか」の内容については、「勉強方法(49%, 189人)」という結果が得られた。この結果より、「志望大学の学生・先輩から勉強方法についてのアドバイスがほしい」と思っている生徒が半数ちかく存在することが明らかになった。つまり、とくに自分の志望大学の先輩からの話が聞きたいということは、成功者の体験談を参考にしたいということの意味する。栗山他(2001)では体験談のパス係数が低かったことは、調査実施時期が11月頃と、受験勉強も後半にさしかかっている時期であるため、すでに体験談で吟味する時期ではなかったことが推察され、一概に体験談があまり影響しないということを表しているわけではないと考える。

研究1と2に基づいて、高校生の進路決定への示唆を述べる。体験記や先輩からの成功談などのような体験談は、実際、高校において、生徒の目に触れるような工夫は見受けられるが、それをどのように進路意思決定に利用するかということまでは、あまり詳しく指導はなされていないのが現状である。体験談の情報をどのように探せばよいか(情報検索の教育)、そしてそれをどのように利用して意思決定を行うのか(情報利用の教育)を進路指導において行う必要性が考えられる。これらを行うことで、短慮や直観だけで進路を決定せず、さまざまな要因を考慮し決定する能力を育成し、より満足できる意思決定、後悔しない意思決定ができると考えられる。

決定における期待と満足

進路決定とは、様々な制約を処理しながら、最適な選択肢を探し出す過程である。その中で、自らの満足を最大化しようとした場合に実際に把握される満足度は、効用関数の上でどの程度の効用が得られるかというよりは、事前の期待や標準的要件といった何らかの基準を満たしているかどうか依存することが多い。たとえば、Oliver(1977, 1980)は期待と現実のパフォーマンスとの差が満足に影響を与えるという期待不一致モデ

ル (expectation-disconfirmation model) を示している。期待とは、意思決定の前にある基準であり、現実とは意思決定の後に知りうる事実である。満足が意思決定の前後で生ずる以上、進路決定の前後の調査と結果の比較が必要となる。

学生の満足度調査は、海外では全国規模で行われている (たとえば、米国: Noel-Levitz (2007)、英国: Surridge (2007) など)。日本においても、学生満足度の調査が全国的にも (ベネッセ教育総研, 2005, ベネッセコーポレーション, 2005)、また各大学の取組によっても行われている。学生の満足度は、大学の質の概念とともに大学にとって必要不可欠の概念となりつつある (齊藤, 2002)。

しかし、それらの学生満足度は進路選択を終えた大学生を対象とした調査であって、進路選択の前後での比較はなされていない。また、属性による比較が行われていても、それらの要因の中で何が最も強く学生満足度に影響を与えるかといった分析はなされていない。本研究では、期待と現実との差がどのように意思決定による満足度に影響を与えているのかについて、学生による事前の期待と事後のパフォーマンスの評価を軸として検討を行う。

研究 3

方法

2001年度から2005年度にかけてS県立高校の3年生および卒業生を対象に行われた調査のうち、2002年度から2004年度の3年生、および卒業5ヶ月後に行われた追跡調査の結果を用いた。両方の調査に参加し、かつ整合のとれた回答者数は259名 (2002年度96名, 2003年度115名, 2005年度48名) であった。なお、卒業後浪人せずに進学した者のデータのみを用いている。

3 学年在学時 (11月) の調査項目

進学先への期待 「進学動機」 (表1), 「志望校決定の考慮条件」 (表2), に関して、各項目 (表1, 表2参照) を5段階評定 (1: 全く達成されないと思う-5: とても達成されると思う; 1: 全く得られない-5: とても得られる) させた。考慮条件に関しては、吉中 (1994) を用いて19項目作成した。

卒業後 (8月) の調査項目

現在の進路 現在の進路に関して、学校種、文系・理系の別、在学する学校が第一志望か否かを選択させた。また、将来の職業の決定の度合いについても5段階評定で質問を行った。

進学先の現状 上述の進学動機と考慮条件の入学後の状況に関して、各項目を5段階評定させた。

総合的満足 「進路に満足」、「他の人に勧める」、「進路決定が正しかった」について、前者2つは100点満点で、最後の進路決定の正しさについては5段階で評定させた。これら3変数の和を求めるときには、各変数を正規化した後に合計した。

結果と考察

期待の大きさ 生徒の進学動機としてあげられた事柄への期待 (表1) は、「学校で様々なことを経験すること」、「興味ある分野を深く掘り下げる」、「専門的知識や技術を身につけること」など、大学での生活や学修によって達成されるであろう大学の目的に近い事柄について、高い値を示している。一方、就職や資格などの、大学卒業直後のキャリアに関する期待は相対的に高い値となっているが、「高い社会的地位を得ること」、「就職後、より高い役職に就くこと」、「就職後、多くの収入・給与を得ること」などの項目に関しては、あまり達成できないと考えていることがわかった。

志望校決定の際に考慮した事柄 (表2) として最も値が高いのは、「興味のある学部・学科であること」、「自分の興味のある科目を学べること」、「学びたい授業科目があること」のような専門領域に関する項目である。これに続くのが、「学校での生活が楽しいこと」のような学生生活に関する項目、「教育が充実していること」のような教育に関する項目、そして「将来自分の希望する職業に就くことができること」のような就職に関する項目が続く。また、知名度、評判、建物等の設備といった、これまで生徒が考慮していたと考えられる項目が比較的低い値に抑えられていることは特徴的である。進路指導の効果であるかもしれない。そして、「学費が安いこと」のみが3以下の値となった。学生の学校選択の要素としてあまり考慮されていないことがわかる。

期待と現状との比較 これらの大学進学前の彼らの期待に関する評定値を大学入学後の現状の評定値と比較する (表1, 表2)。全体としてみると、大学入学後の現状の評価は彼らの進路選択時の期待よりも小さい。

進学動機に関しては、「友人を得る」を除いたすべての項目で期待よりも現状の評定が小さいという結果になった (表1)。就職・就業に関連する進学動機に関しても、学業に関する進学動機に関しても低く、結果的に大学への進学動機として

表1 進学先への期待と満足（進学動機）

進学動機	平均（標準偏差）		t値	因子 負荷量
	高校3年生 11月	卒業・進学後 1年目8月		
社会的地位（因子寄与率 16.4%）				
高い社会的地位を得ること	2.71 (1.08)	2.53 (0.97)	2.36*	.80
就職後、多くの収入・給与を得ること	2.94 (1.06)	2.72 (0.91)	3.43**	.72
社会に通用する肩書きを手に入れること	3.02 (1.14)	2.75 (1.06)	3.32**	.66
就職後、より高い役職に就くこと	2.77 (1.11)	2.51 (1.00)	3.48**	.65
就職に有利になること	3.57 (1.11)	3.11 (1.12)	5.83**	.52
資格をとること	3.71 (1.18)	3.39 (1.24)	3.98**	.30
知識探求（因子寄与率 13.1%）				
興味のある分野を深く掘り下げること	4.22 (0.93)	3.80 (1.15)	5.52**	.82
得意とすることを追求すること	3.86 (1.03)	3.44 (1.09)	5.34**	.61
知的好奇心を満たすこと	3.73 (1.06)	3.50 (1.10)	2.78**	.53
自分の才能を伸ばすこと	3.79 (0.98)	3.45 (1.02)	4.83**	.43
エンジョイ（因子寄与率 11.7%）				
青春をエンジョイすること	3.84 (1.07)	3.64 (1.18)	2.35*	.79
同じような目的を持った友人を得ること	4.00 (0.98)	4.01 (1.07)	-0.15	.64
学校で様々な経験をすること	4.36 (0.88)	3.97 (1.08)	5.47**	.47
幅広い教養を身につけること	4.09 (0.90)	3.42 (1.00)	9.45**	.27
職業的知識・技術（因子寄与率 9.8%）				
職業に直結する知識・技術を習得すること	4.04 (1.05)	3.70 (1.17)	4.67**	.75
専門的な知識や技術を身につけること	4.11 (1.01)	3.78 (1.16)	4.39**	.54
自分にあった職業を見つけること	3.92 (0.97)	3.50 (1.05)	5.49**	.52

註 数値は5段階評定値（1：全く達成されないと思う－5：とても達成されると思う） *: $p<.05$, **: $p<.01$

表2 進学先への期待と満足（志望校決定の考慮条件）

志望校決定の考慮条件	平均（標準偏差）		t値	因子 負荷量
	高校3年生 11月	卒業・進学後 1年目8月		
授業科目（因子寄与率 13.0%）				
学校に学びたい授業科目があること	4.36 (0.81)	3.71 (1.12)	9.13**	.78
自分の興味のある科目を学ぶこと	4.41 (0.81)	3.49 (1.15)	12.44**	.77
興味のある学部・学科で学ぶこと	4.57 (0.74)	3.91 (1.13)	9.13**	.75
自分の得意科目を学ぶこと	3.69 (1.12)	3.07 (1.17)	7.17**	.52
施設設備（因子寄与率 10.0%）				
学校の建物等の施設がよいこと	3.40 (1.18)	3.24 (1.28)	1.72	.97
学校のキャンパスが綺麗であること	3.32 (1.23)	3.16 (1.39)	1.53	.81
コンピュータ等の設備が整備されていること	3.34 (1.11)	3.77 (1.12)	4.64**	.44
評判・知名度（因子寄与率 8.8%）				
学校の評判がよいこと	3.57 (1.09)	3.12 (1.09)	5.84**	.84
学校の知名度が高いこと	3.50 (1.12)	3.01 (1.24)	5.83**	.57
教育・研究の質（因子寄与率 8.4%）				
学校の教員による研究が充実していること	3.62 (1.07)	3.02 (1.05)	7.21**	.69
学校の教育が充実していること	3.81 (1.00)	3.16 (1.02)	8.53**	.63
学校の教員の質が高いこと	3.61 (1.07)	3.03 (1.05)	6.90**	.60
就職・就業（因子寄与率 7.8%）				
自分の希望する職業に就くことができること	3.80 (1.09)	3.16 (1.09)	8.07**	.80
学校で希望する資格・免許を取得できること	3.69 (1.24)	3.38 (1.24)	3.73**	.55
この学校からの就職が有利であること	3.64 (1.14)	2.98 (1.16)	7.98**	.51
大学生生活（因子寄与率 4.7%）				
学校の課外活動が活発であること	3.48 (1.11)	3.30 (1.23)	1.98*	.46
学校での生活が楽しいこと	4.16 (0.90)	3.77 (1.18)	4.87**	.42
物理・経済的条件（因子寄与率 4.2%）				
学校の場所が自分にとって都合がよいこと	3.42 (1.35)	2.68 (1.43)	6.43**	.60
学費等が安いこと	2.81 (1.38)	2.54 (1.39)	2.72**	.53

註 数値は5段階評定値（1：全く得られない－5：とても得られる） *: $p<.05$, **: $p<.01$

あげられた事柄に関しては総じて満たされず、新たな発見もできていないと考えられる。

進路選択時の考慮条件に関しては、コンピュータ、キャンパス、建物等の施設設備を除き、他のすべての項目で有意に現状の評定値の方が低い。特に、「自分の興味のある科目を学べること」、「興味のある学部・学科であること」、「学校に学びたい授業科目があること」のような、大学の本質的な教育面での差異が大きくなっていることが明らかとなった。最初の期待が大きいため、あるいは進学前の段階では進学者は大学に対して限られた情報と漠としたイメージしか持っていないためとも解釈できるが、大学が学生の期待に応えられていないということは明らかであり、大学として留意しなければならない点と考えられる。

期待と現状の差が満足に与える影響 以上のような大学に対する期待と現状のパフォーマンスとの間の差は、現在の大学に対する満足に影響を与えているはずである。そこで、大学に入学した後の満足度を目的変数とし、入学前の期待と現状(入学後のパフォーマンス)の評定値の差に関する因子分析(最尤法, バリマックス回転)によって算出された因子得点(進学動機4因子:社会的地位, 知識探求, エンジョイ, 職業的知識・技術; 考慮条件7因子:授業科目, 施設設備, 評判・知名度, 教育・研究の質, 就職・就業, 大学生活, 物理・経済的条件), 学生の属性(高校在学時の自己申告成績, 職業の決定度, 卒業年度), 大学の属性(理系文系, 国私立, 第一志望か否か)を説明変数とした重回帰分析を行った。なお, 期待と現状の差に関する因子分析結果は, 期待の因子分析結果とほぼ一致しており, 期待, および期待と現状の差が, ほぼ変わらない因子構造を有していることが確認された。

重回帰分析の結果, 表3に示すように, 授業科目, エンジョイ, 進学先が第一志望, 高校在学時

表3 選択した進路(進学先の学校)の満足度に影響を与える要因

要因	標準化偏回帰係数	t値
考慮因子: 授業科目	.313	6.01**
動機因子: エンジョイ	.259	4.53**
進学先が第一志望	.165	2.99**
高校在学時の成績	.165	3.12**
考慮因子: 評判・知名度	.147	2.71**
考慮因子: 大学生活	.146	2.66**
考慮因子: 物理的・経済的条件	.143	2.67**
動機因子: 社会的地位	.133	2.52*
文系 (=1, 理系に対して)	.130	2.47*

註 $R^2=.423$, Adjusted $R^2=.400$, $*p<.05$, $**p<.01$

の成績, 評判・知名度, 大学生活, 物理的・経済的条件, 社会的地位, 文系(理系に対して)の要因が満足度の総合評価に対して影響を与えていることが明らかとなった。その方向性は, 現状が期待に近いほど, 現在の進路に満足をしているといえる。

分野・科目に関しては, 自分の期待していた内容を学ぶことができなければ, 満足が低いことは当然である。また, 大学生活や将来の生活を楽しむというような要因も強く影響しているのは, 現在の大学生の考え方を表しているものと考えられる。注目すべきは, 進学校が第1志望か否かという要因, そして高校在学時の成績の要因である。つまり, 大学生に満足度調査をしても, この分析結果からは第1志望以外に不本意に入学した学生の満足度は低いものと考えられ, 成績の要因も受験の合格可能性から自分の進路を変えざるを得ないためと考えられる。

これらの大学の属性に直接依存しない結果は, 第一志望に進学できなかった者が, 自分の設定した基準よりも幾分劣る学校に進学したためとも解釈できる。しかし, 実際には大学間の質の差はそれほど大きくないと考える方が自然である。日本の場合, 大学入学資格はそれまでの学業等の結果ではなく, 入学試験の機会に発揮することができた能力に強く依存する。入学試験の結果から, 第一志望校という最良の選択肢を捨てざるを得なかったことから, 満足を形成する判断基準そのものが変化した, すなわち「隣の芝生は青い」と思っている可能性が考えられる。

進路先に対する後悔の時間的変化と対処方法

後悔は, 自分が予測した結果と悪い意味で異なった場合に生じるネガティブな感情である(e.g., Gilovich & Medvec, 1995; Gilovich, Medvec, & Kahneman, 1998; Kahneman & Miller, 1986)。また後悔には, 結果の全体的な評価としての後悔(結果後悔: ○○したことあるいはしなかったことを後悔している)だけでなく, 劣った選択肢を選んだことによって生じる後悔(選択後悔: 他の選択肢を選んでおけばよかった)や失敗の原因を自己に求めるために生じる後悔(自己非難後悔: 自分の判断が間違っていた)がある(e.g., Connolly & Zeelenberg, 2002; Pieters & Zeelenberg, 2005)。

一般的に, 後悔を回避するためには熟慮した上

で意思決定をした方がよい（上市・楠見，2004）。実際の大学進学に関する後悔に関しては、あまり熟慮せずに現役で第一志望校以外の大学に進学した人は、浪人生よりも後悔が大きいことが示されている（上市・栗山・齊藤・楠見，2003）。仮想的な受験状況においては、第一志望校以外の大学進学者は時間経過とともに進路先に対する後悔が増大し、逆に第一志望校を落ちて浪人した人は減少する傾向がある（上市・楠見，2004）。また後悔を低減させるための対処としては、合理化（失敗もよい経験になる；e.g., Festinger, 1957）、行動変更（今後このような行動はしない）、行動改善（今後のために失敗しないように努力する）などの方法がある（たとえば 上市・楠見，2002；2004）。

しかし先行研究では、(a) 実際の後悔が意思決定スタイルや時間経過によってどのように変化するのか、(b) どのような対処方法が後悔の低減に有効なのかが不明である。よって本研究では、実際の高校生の進路、特に大学進学を希望した人に対して、最終的な進路先別に、意思決定スタイルが後悔の時間的変化に及ぼす影響、および進路先で後悔している人に対し、どのような対処方法が後悔低減に有効かについて検討する。

研究 4

方法

S県立高校の2004年度卒業生328名（男性162名，女性165名，不明1名）に対して、高校在学中（2004年11月）、卒業時（2005年3月）、卒業後5ヶ月後（2005年8月）に質問紙を実施した。各質問項目については、5段階評定（1：全くあてはまらない～5：とてもあてはまる）で測定した。

質問項目

意思決定スタイル 意思決定する時の思考の傾向性を測定する尺度。Janis & Mann (1977) を参考にして、31項目を作成した（付録参照）。高校在学中に測定した。

後悔および後悔対処尺度 卒業時および卒業後5ヶ月後それぞれの時点で測定した。後悔尺度は、結果に対する後悔（outcome regret：進路先に進むことを後悔している）、選択後悔（option regret：4月からの進路先以外の進路先に進む方がよかった）、自己非難後悔（self-blame regret：受験勉強に専念しておけばよかった）の3項目。対処尺度は、短期的合理化（進路先では自分の能力を高めることができる）、長期的合理化（進路先に進むことは今後の自分の人生にとって有益

だ）、行動改善（進路先では自分の能力を高めるための努力をする）、行動変更（今度は妥協せず、自分の理想を求める）の4項目であった。

結果と考察

意思決定スタイル 31項目を因子分析（最小二乗法，エカマックス回転）して、共通性の低い項目を外し、再度分析した。その結果、熟慮型（例：課題に取り組むときは全体とどのように関係するか考える、目標を達成するためにはどのような方法を用いればよいのかよく考える）、比較型（選んだ選択肢と選ばなかった選択肢をいつまでも比較する、選ばなかった選択肢がいつまでも気になる）、責任型（何事も自分の責任で決める、どんなことでも自分で決める）の3因子が得られた（付録参照）。また3因子の累積寄与率は37.2%であった。

意思決定スタイルが後悔に及ぼす影響 高校3年時、卒業時、卒業後5ヶ月時全てに回答をした、第一志望校進学者28名、第一志望校以外の大学進学者（以下、第二志望校進学者）26名、および浪人生24名、合計78名を対象に分析をおこなった。意思決定スタイルの各因子の因子負荷量が上位の2項目の平均評定値によって高群と低群に分類し、3つの後悔（結果後悔、選択後悔、自己非難後悔）を従属変数として、2（意思決定スタイル：各因子の高群、低群）×3（進路先：第一志望校進学者、第二志望校進学者、浪人）の時間（卒業時、5ヶ月後）による繰り返しのある分散分析をおこなった（表4に意思決定スタイルの影響が有意または有意傾向を示した結果を示す）。

その結果、熟慮型意思決定スタイルが結果後悔に及ぼす影響については、熟慮型と進路先の交互作用 ($F(2,43)=4.562, p=.016$)、熟慮型と時間の交互作用 ($F(1,43)=4.337, p=.043$) が有意に認められた（図3）。これは、熟慮せずに進路を決めた浪人生は、他の群よりも、現在の進路に進んだことを後悔している傾向が高いこと、また進路を

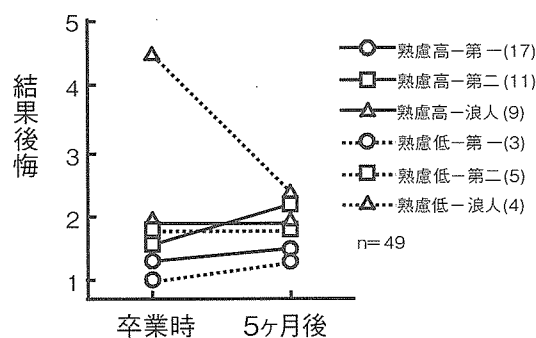


図3 意思決定スタイルと結果後悔の関連性
() 内の数値は各群の人数

表4 卒業時と5ヶ月後における各後悔の平均値(標準偏差):意思決定スタイル得点の高低群比較

	高群		低群	
	高校卒業時	5ヶ月後	高校卒業時	5ヶ月後
熟慮型スタイル				
結果後悔				
第一志望校進学者	1.35 (.100)	1.47 (.80)	1.00 (.00)	1.33 (.58)
第二志望校進学者	1.64 (.81)	2.18 (.87)	1.80 (.84)	1.80 (.84)
浪人	1.89 (.93)	1.78 (1.09)	4.25 (.96)	2.50 (1.29)
選択後悔				
第一志望校進学者	2.75 (2.06)	1.50 (.58)	1.94 (1.03)	1.65 (.86)
第二志望校進学者	2.20 (1.30)	2.60 (.90)	2.00 (1.00)	2.82 (.75)
浪人	3.25 (1.71)	2.75 (1.26)	1.67 (1.12)	2.00 (1.41)
比較型スタイル				
結果後悔				
第一志望校進学者	2.00 (1.55)	1.83 (1.17)	1.00 (.00)	1.29 (.47)
第二志望校進学者	1.42 (.67)	1.92 (.90)	2.50 (.58)	2.50 (.58)
浪人	2.50 (1.31)	2.00 (1.07)	2.80 (1.78)	2.00 (1.41)
選択後悔				
第一志望校進学者	1.80 (1.15)	1.53 (.74)	2.83 (1.33)	1.83 (.98)
第二志望校進学者	2.50 (1.30)	3.50 (.58)	1.92 (1.00)	2.50 (.67)
浪人	2.60 (1.82)	1.80 (1.10)	1.88 (1.25)	2.50 (1.51)
責任型スタイル				
結果後悔				
第一志望校進学者	1.00 (.00)	1.30 (.48)	1.60 (1.27)	1.60 (.97)
第二志望校進学者	1.57 (.79)	2.00 (.58)	1.78 (.83)	2.11 (1.05)
浪人	2.36 (1.36)	2.00 (1.27)	4.00 (1.41)	2.00 (.00)

註 数値は5段階評定値(1:まったくあてはまらない-5:とてもあてはまる)

決めるときにあまり熟慮しなかった人たちは、卒業直後は進路先に対する後悔は大きいですが、時間が経過するとともに、熟慮して決めた人たちと同じ程度くらいまでに後悔が減少することを示している。選択後悔については、熟慮型の主効果が有意傾向だった ($F(1,44)=3.928, p=.054$)。これは、熟慮して進路を決めた人は、熟慮しなかった人より、他の進路に進んでいけばよかったと後悔する傾向は低いことを示唆している。自己非難後悔については有意な影響はなかった。

比較型意思決定スタイルが結果後悔に及ぼす影響については、比較型と進路先の交互作用が有意だった ($F(2,43)=3.541, p=.038$)。これは、他の選択肢とあまり比較せずに進路先を決めた第一志望校進学者は、他の群よりも、進路先に対する後悔が小さいことを示している。選択後悔については、比較型と進路先の交互作用 ($F(2,44)=3.167, p=.052$) が有意傾向だった。これは、他の選択肢とあまり比較せずに進路先を決めた第一志望校進学者は、他の群よりも、他の進路に進んでいけばよかったと後悔する傾向が低いことを示唆している。自己非難後悔については有意な影響はなかった。

責任型意思決定スタイルが結果後悔に及ぼす影響については、責任型と時間の交互作用 ($F(1,43)=4.209, p=.046$) が有意だった。これは、進路を自分自身で決める傾向が低い人は、卒業直後は他

の進路に進んでいけばよかったと後悔する傾向は高いが、時間経過とともに他の人たちと同じ程度にまで後悔が減少することを示している。選択後悔と自己非難後悔については有意な影響はなかった。

これらの結果より、熟慮型、比較型、責任型の3つの意思決定スタイル全てが進路先に対する全体的な評価としての後悔に影響することがわかった。特に熟慮型と比較型に関しては、選択に対する後悔にも若干ではあるが影響することがわかった。つまり、進路を決める場合には、様々なことを考慮し、そして自分の責任で決めるようにしておけば、どのような進路先に進んだとしても後悔が小さいことを意味している。また後悔しないためには意思決定をするときに選択肢を過度に比較しすぎない方がよいこともわかった。このことは、意思決定をするときに選択肢が多すぎると、選択肢が少ないときよりも、自分の選択結果に対して後悔する傾向が高くなる (Schwartz, 2004) ということをサポートする結果といえる。さらに後悔を避けるためには、意思決定をした後であっても自分が選択した選択肢と選択しなかった選択肢をいつまでも比較しない方がよいことが指摘されている (上市・高橋, 2005)。つまり進路を決める時だけでなく、実際の進路先が決まった後も、過度に選択肢同士を比較しない方が、後悔を避けるためには必要といえる。

後悔対処が後悔の低減に及ぼす影響 各後悔（結果後悔，選択後悔，自己非難後悔）に対して全く後悔を感じていない人（卒業時，卒業5ヶ月後両方とも「1：あてはまらない」と回答した人）以外を分析対象とした。短期的合理化，長期的合理化，行動改善，行動変更の各対処法の合計点の平均によって高群と低群に分類し，各後悔を従属変数として2（各対処法：高群，低群）×3（進路先：第一志望校，第二志望校，浪人）の時間（卒業時，卒業5ヶ月後）による繰り返しのある分散分析をおこなった（表5に対処法が有意または有意傾向を示した結果を示す）。

その結果，短期的合理化が結果後悔の低減に及ぼす影響については，短期的合理化と時間の交互作用（ $F(2,30)=6.345, p=.005$ ）が有意だった。これは，進路先で自分の能力を高められると思うことによって，進路先に対する後悔に対処する傾向の高い浪人生は，卒業直後は進路先に対する後悔は高いが，その後悔は時間経過とともに減少することを示している。自己非難後悔については，短期的合理化と進路先の交互作用（ $F(2,42)=4.175, p=.022$ ）が有意だった。これは，第一志望校進学者で，進路先で能力を高められると合理化している人は，第一志望校進学者で合理化していない人よりも，高校生の時に受験勉強に専念すればよかったと後悔する傾向が低いことを示している。長期的合理化が選択後悔の低減に及ぼす影響については，長期的合理化の主効果（ $F(1,41)=7.230, p=.010$ ）が有意だった（図4）。これは，現在の

進路先を自分の人生にとって有益だと考える人ほど，現在の進路先は自分に向いていないのではないかと考える傾向が低いことを示している。

行動改善が結果後悔の低減に及ぼす影響については，行動改善と進路先と時間の交互作用（ $F(2,30)=4.203, p=.025$ ）が有意だった。これは，今後は自分の能力を高めるために努力しよう思っている浪人生は，卒業直後は現在の進路先に対する後悔が大きいですが，時間経過とともにその後悔が減少することを示している。

行動変更に関しては，後悔の低減に有意な影響を及ぼさなかった。

これらのことから，後悔を低減させるために最も有効な方法は合理化（進路先で自分の能力を高められる，進路先に進んだことは今後の自分の人生において有益だ）することであることがわかった。

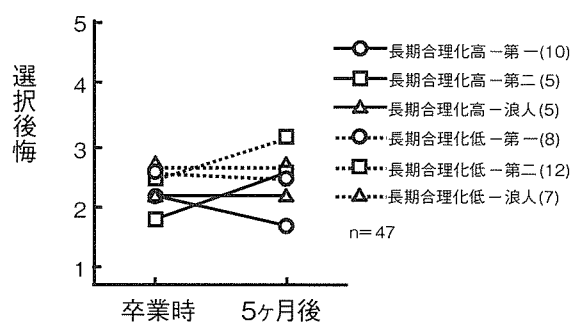


図4 後悔対処と選択後悔の関連性 ()内の数値は各群の人数

表5 卒業時と5ヶ月後における各後悔の平均値（標準偏差）：後悔対処法の高低群比較

	高群		低群	
	高校卒業時	5ヶ月後	高校卒業時	5ヶ月後
短期的合理化				
結果後悔				
第一志望校進学者	1.14 (.38)	2.00 (.58)	2.67 (2.08)	2.67 (1.16)
第二志望校進学者	1.67 (.58)	1.67 (.58)	2.08 (.90)	2.50 (.67)
浪人	3.67 (1.21)	1.67 (.82)	2.40 (.89)	2.80 (1.30)
自己非難後悔				
第一志望校進学者	2.62 (1.12)	2.54 (1.45)	3.33 (1.21)	3.67 (1.51)
第二志望校進学者	4.00 (1.41)	4.00 (.82)	2.83 (1.03)	2.83 (1.12)
浪人	3.78 (1.30)	4.22 (1.09)	3.50 (1.00)	3.00 (1.83)
長期的合理化				
選択後悔				
第一志望校進学者	2.20 (1.14)	1.70 (.68)	2.63 (1.41)	2.50 (1.07)
第二志望校進学者	1.80 (.84)	2.60 (.58)	2.50 (1.17)	3.17 (.84)
浪人	2.20 (1.30)	2.20 (1.30)	2.72 (1.70)	2.71 (1.38)
行動改善				
結果後悔				
第一志望校進学者	1.57 (1.51)	2.43 (.79)	1.67 (.58)	1.67 (.58)
第二志望校進学者	1.86 (.83)	2.13 (.64)	2.14 (.90)	2.57 (.79)
浪人	3.25 (1.16)	1.75 (1.04)	2.67 (1.53)	3.33 (.58)

註 数値は5段階評定値（1：まったくあてはまらない-5：とてもあてはまる）

まとめ

研究4では、高校生が最終的な進路を決めた時および実際に進路先に進んだ後で経験する後悔に関して、意思決定スタイルがどのように影響するか、そしてどのような後悔対処法が後悔低減に有効かについて検討した。その結果、熟慮した上で進路を決めた方が、後悔が小さいことがわかった。そして意思決定の際にはあまり多くの選択肢を考慮して比較しない方がよいということも示された。現在の進路先に後悔を感じている場合には、合理化することによって、進路先に進んだことに対する結果後悔、他の進路先に進んだ方がよかつたのではないかという選択後悔、高校の時のもっと勉強しておけばよかつたという自己非難後悔を低減できることがわかった。これらのことから高校生の進路を指導する際には、受験の候補をあまり多くしすぎないようにして、少数の候補について十分に熟慮するように指導することがよいと思われる。しかしながら自己非難後悔に関しては、どのような意思決定をすれば後悔しないのかわからないので、今後検討する必要があるだろう。

まとめと進路指導への示唆

以上の成果は大きく次のようにまとめられる。

研究1と2の進路意思決定における類推とアドバイスの役割に関しては、本研究では特に、体験談の役割を自分の進路決定にどのように役立てるかを検討し以下の点が明らかになった。

(i) 進学動機(得意分野を伸ばす, エンjoyする, 社会的地位を得る)によって体験談の利用の仕方が異なる。

(ii) 体験談を利用する生徒の方が長期的展望をもって意思決定を行っている。

研究3の進学者の事前期待と満足に関しては、高校3年時調査と卒業後の追跡調査によって以下の点が明らかになった。

(iii) 進学動機に関しては、進路選択時には、学びたい分野、興味のある分野、就きたい職業などを期待して進学先を選択していた。しかし、期待ほどには満足していないが、同様の目的を持つ友人を得ることについては満足が得られている。

(iv) 進路決定時の考慮条件に関しては、コンピュータ等の設備、興味ある科目、友人、キャンパスの綺麗さ、教員の質の項目を除き、期待よりも満足が小さい。全体的に見て、第一志望ではない学校に進学した者の方が満足の程度が低い。

(v) 分野や科目に関する事柄に満足し、経済的・物理的条件に満足し、第1志望校に進学しているほど、進路選択に関する満足は大きい。

研究4の高校生の進路決定における意思決定スタイルと後悔に関しては、高校3年時と卒業時の調査および卒業後の追跡調査によって以下の点が明らかになった。

(vi) 意思決定スタイルは後悔の大きさや後悔の時間的な変化に影響を及ぼす。

(vii) 現在の進路先に対して後悔をしている場合には、合理化することによって後悔を低減することができる。

以上の結果は、高校生の進路選択において、自他の過去の経験に基づく類推や周囲のアドバイスを利用しつつ、進路先への期待に基づいて選択をおこなうという認知的側面と、生徒の意思決定方略や意思決定スタイルの差異および第一希望校に入学できたかどうか、入学後の満足あるいは後悔を生起させるという感情的側面が明らかになった。この進路選択の認知過程については、類推や制約充足理論(Holyoak & Thagard, 1995)に基づいて、生徒が類推によって選択肢や効用を推論する過程や、期待によって制約条件を充足する認知過程をさらに検討することが必要である。一方、感情過程については、事前の期待や後悔の予期が、選択に及ぼす影響、入学後の満足や後悔が教訓としてその後の就職などの人生の決定に及ぼす長期的な影響をさらに検討する必要がある。また、本研究結果に基づく進路指導への新たな示唆は以下の4点である。(a) 生徒の進路に関する長期的な視野とともに進学動機を明確化させて、分析的・熟慮的な意思決定を促進すること、さらに(b) 生徒の志望大学の学生・先輩などの体験談やアドバイスを提供すること、(c) 入学後の期待はずれや失望、後悔はしばしば起こることを踏まえ、後悔の予期(この決定をしたら/しなかったら後悔するかどうか)(上市・楠見, 2000)を決定において活用すること、(d) そして満足する結果でなかった場合は、その教訓を生かした将来のための行動改善が重要である。

引用文献

- ベネッセコーポレーション 2005 進路選択に関する振り返り調査—大学生を対象として—報告書. 平成17年度経済産業省委託調査報告書. <http://benesse.jp/berd/center/open/report/shinrosentaku/2005/index.html> (November 29,

- 2007)
- ベネッセ教育総研 2005 学生満足度と大学教育の問題点 2004年度版 ベネッセ教育総研.
- Connolly, T. & Zeelenberg, M. 2002 Regret and decision making. *Current Directions in Psychological Science*, **11**, 212-216.
- Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. USA: Row, Peterson and Company. (末永俊郎監訳 1965 認知的不協和の理論：社会心理学序説 誠信書房)
- 湖上克義 1984a 進学志望の意志決定過程に関する研究 教育心理学研究, **32**, 59-63.
- 湖上克義 1984b 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, **32**, 65-69.
- Gilovich, T., & Medvec, V. H. 1995 The experience of regret: What, when, and why. *Psychological Review*, **102**, 379-395.
- Gilovich, T., Medvec, V. H., & Kahneman, D. 1998 Varieties of regret: A debate and partial resolution. *Psychological Review*, **105**, 602-605.
- Janis, I., & Mann, L. 1977 *Decision making: A psychological analysis of conflict, choice, and commitment*, New York, NY: Free Press.
- Holyoak, K. J. & Thagard, P. 1995 *Mental leaps: Analogy in creative thought*. Cambridge, MA: MIT Press. (鈴木宏昭・河原哲雄監訳 1998 アナロジーの力：認知科学の新しい探求 新曜社)
- Kahneman, D. & Miller, D. T. 1986 Norm theory: Comparing reality to its alternatives. *Psychological Review*, **96**, 136-153.
- Koehler, D.J. & Harvey, N. 2004 *Blackwell handbook of judgment and decision making*. Malden, Mass.: Blackwell.
- 栗山直子・上市秀雄・齊藤貴浩・楠見 孝 2001 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 教育心理学研究, **49**, 409-416.
- 楠見 孝 2006 進路意思決定における認知・感情過程のモデル化 文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) 平成14-17年度報告書.
- Noel-Levitz 2007 *2007 National student satisfaction and priorities report*. Retrieved November 29, 2007, from <http://www.noellevitz.com/Benchmark2007>
- Oliver, R. 1977 Effect of expectation and disconfirmation on postexposure product evaluations: An alternative interpretation. *Journal of Applied Psychology*, **62**, 480-486.
- Oliver, R. 1980 Conceptualization and a cognitive model of the antecedents and consequences of satisfaction decisions. *Journal of Marketing Research*, **17**(4), 460-469
- Pieters, R. & Zeelenberg, M. 2005 On bad decisions and deciding badly: When intention-behavior inconsistency is regrettable. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **97**, 18-30.
- 齊藤貴浩 2002 TQMの大学経営への適用に関する課題：企業経営と大学経営の差異に着目して 大学評価 (大学評価・学位授与機構), **1**, 105-127.
- Schwartz, B. 2004 *The paradox of choice: Why more is less*. New York, NY: Harper Perennial.
- Simon, H.A. 1996 *The science of the artificial* (3rd ed.), Cambridge, Mass.: The MIT Press. (稲葉元吉・吉原英樹訳, 1999 システムの科学 パーソナルメディア)
- 下村英雄 1996 大学生の職業選択における情報探索方略：職業的意思決定理論によるアプローチ 教育心理学研究, **44**, 145-155.
- 下村英雄 1998 大学生の職業選択における決定方略学習の効果 教育心理学研究, **46**, 193-202.
- Surridge, P. 2007 The national student survey 2006, higher education funding council for England. Retrieved November 29, 2007, from http://www.hefce.ac.uk/pubs/RDreports/2007/rd14_07/
- 鈴木規夫・柳井晴夫 1993 因果関係モデルによる高校生の進路意識の分析 教育心理学研究, **41**, 324-331.
- 鈴木規夫・椎名久美子・石塚智一・柳井晴夫 1997 高校生の進路選択に関わる要因分析 大学入試センター研究紀要, **26**, 1-28.
- 竹村和久 1996 意思決定とその支援 市川伸一編 認知心理学4 思考 東京大学出版会 Pp.81-105.
- 豊田秀樹・前田忠彦・室山晴美・柳井晴夫 1991 高等学校の進路指導の改善に関する因果モデル構成の試み 教育心理学研究, **39**, 316-323.
- 上市秀雄・楠見 孝 2000 後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響：感情・パーソナリティ・認知要因のプロセスモデル 認知科学, **7**, 139-151.
- 上市秀雄・楠見 孝 2002 後悔への対処方法と時間的変化：日常経験の調査に基づく検討 日本心理学会第66回大会発表論文集, 832.
- 上市秀雄・楠見 孝 2004 後悔の時間的変化と対処方法：意思決定スタイルと行動選択との関連性

- 心理学研究, 74, 487-495.
- 上市秀雄・栗山直子・齊藤貴浩・楠見 孝 2003
高校生の進路意思決定の継続調査2：進路決定後の後悔および後悔対処に関する検討 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 594.
- 上市秀雄・高橋由直 2005 意思決定スタイルや選択コストが行動後の感情に及ぼす影響 日本心理学会第69回大会発表論文集, 917.
- 浦上昌則 1992 価値観についての進路発達の研究 進路指導研究, 3, 15-21.
- 八木晶子・齊藤貴浩・牟田博光 2000 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する研究 進路指導研究, 20, 1-8.
- Yaniv, I. I., & Kleinberger, E. 2000 Advice taking in decision making : Egocentric discounting and reputation formation. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 83, 260-281.
- 横山明子 1997 コンピュータによる進路決定支援システムの構築 進路指導研究, 17, 1-11.
- 吉中 淳 1994 高校生の進路選択における計画性を規定する要因の分析的研究 進路指導研究, 15, 20-29.
- Zsombok, C.E., & Klein, G. 1997 *Naturalistic decision making*. Mahwah, NJ:Lawrence Erlbaum Associates.

謝辞

本研究の調査実施に当たり、御世話になりましたS県立高校の進路指導担当、3年生担任をはじめとする先生方と、回答いただいた生徒と卒業生の皆さんに感謝します。

付録 意思決定スタイルの因子負荷量行列

質問項目	熟慮	比較	責任	共通性
課題に取り組むときは、これから行なうことが 全体とどのように関係するか考える	.635	.099	.153	.551
目標を達成するためには、 どのような方法を用いればよいかよく考える	.626	-.055	.153	.593
目標を達成するためには、 その目標が本当に達成できるかどうか検討する	.593	.021	.167	.516
大きな目標を立てるときには、 必ずその目標達成に必要な課題を明らかにする	.588	-.070	.167	.495
様々なことを考慮して、自分の行動を決める	.515	-.022	.197	.527
何か決めるときは、様々な選択肢を互いに比較する	.478	.075	.048	.343
今後の将来のことまで考えた上で、自分の行動を決める	.461	-.055	.268	.516
何事も計画的に考えて行動する	.446	.022	.092	.376
何事も成功した場合と、失敗した場合のことを考える	.434	.208	-.153	.401
自分の選んだ選択肢と選ばなかった選択肢とを、 いつまでも比較してしまう	-.015	.838	-.142	.757
最終的な選択をした後でも、 選ばなかった選択肢のことが気になる	.122	.726	-.109	.636
最終的な決断をした後でも、 選ばなかった選択肢の情報を集めることがある	-.043	.677	-.172	.622
たとえ最もよい結果が得られたとしても、 選ばなかった選択肢のことが気になる	-.084	.672	-.007	.519
ああしておけばよかったのに、と思うことが多い	.137	.433	-.257	.390
最終的な決断をした後でも、 自分の選んだ選択肢の情報を集めることがある	.267	.376	-.063	.408
何事も自分の責任で決める	.165	-.185	.767	.722
どんなことでも自分で決める	.094	-.098	.753	.652
何かを決めるとき、他人の判断よりも、 自分の判断を信頼するほうだ	.217	-.113	.541	.463
自分で決めたことなら、 どんな結果であったとしても受け入れる	.179	-.190	.492	.445
他の人とは相談せずに、自分で決めることが多い	-.035	.010	.433	.322
まわりの雰囲気流されてしまうことがある	.076	.343	-.403	.438
他人の意見を参考にして決めることが多い	.237	.150	-.392	.420
固有値	2.878	2.772	2.541	
寄与率	13.084	12.598	11.551	

註 太字は因子負荷量.350以上